胡笳歌　送顔真卿使赴河隴

岑参

君不聞胡笳聲最悲
紫髯緑眼胡人吹
吹之一曲猶未了
愁殺樓蘭征戍児
涼秋八月蕭關道
北風吹断天山草
崑崙山南月欲斜
胡人向月吹胡笳
胡笳怨兮将送君
秦山遥望隴山雲
邊城夜夜多愁夢
向月胡笳誰喜聞

君聞かずや胡笳の聲　最も悲しきを
紫髯緑眼の胡人吹く
之を吹くこと一曲　猶お未だ了らざるに
愁殺す　樓蘭征戍の児
涼秋八月　蕭關の道
北風　吹断す天山の草
崑崙山南　月斜ならんと欲し
胡人月に向かいて胡笳を吹く
胡笳の怨　将に君を送らんと欲す
秦山遥かに望む　隴山の雲
邊城夜夜　愁夢多し
月に向かいて胡笳　誰か聞くを喜ばん

君よ聞きたまえ、胡笳の音のあの悲しい響きを――
赤いひげ青い目の異国人が吹き鳴らしているこの曲を
この胡笳の調べは一曲が終わらぬうちに遠く樓蘭に出征している勇壮な若者たちさえも深い憂いに沈ませるのだ。
今は仲秋の八月、君の赴く蕭関の道を思いやれば、激しい北風が天山の草をちぎらんばかりに吹いてることだろう。
遙か彼方、崑崙山の南に月が傾く夜更けごろに、北の異人はその月に向かって胡笳を吹く。
この胡笳の哀愁の響き、それを私の悲しい別離の気持ちとして君の門出を送りたい。
ここ秦山のあたりから、遙かに君の目指す隴山の雲を見やる。
その雲のした辺境の町で夜ごと君の結ぶ夢は、きっと望郷の愁いにとざされることが多いだろう。そんな夜、月に向かって吹いている胡笳の音を誰が喜んで聞くだろうか。

《胡　笳》もと胡人が用いた一種の笛。蘆の葉を巻いて作ったものと木製のものがある。
《河　隴》河西（甘粛省武威県）と隴石（青海省西寧）の略称。何れにも節度使がおかれた。
《紫髯緑眼》赤いひげと、青い目をした西域から来た異民族をさす。
《樓　蘭》現在の新疆ウィグル自治区の国名。
《天　山》新疆ウィグル自治区の中央を走る山脈。
《崑　崙　山》新疆ウィグル自治区とチベット間を東西に走る山脈。天山との間にタクラマカン砂漠がある。
《蕭　關》甘粛省固原県にあった西域への軍事要衝地。
《秦　山》長安の南部を走る山脈。
《隴　山》顔真卿が行く河隴のあたりの山をさす。

西域に赴く友人の顔真卿を見送って詠んだ唐の詩人岑参の詩です。顔真卿（七〇九－七八五）はご存知のように能書家として知られていますが、後の安禄山の乱では従兄弟とともに討伐軍を起こして功績をあげるなど豪胆な忠臣でもありました。
歴史書の考証によると顔真卿が河隴（かろう）に赴任したのは西暦七四八年のことで、この詩が作られたのは岑参が進士に及第した四年後の三十三歳の作と考えられます。
このころの唐は玄宗の治世下で栄華を極め、長安は多くの異邦人が住む国際都市でした。当時、阿倍仲麻呂も長安で玄宗に仕えています。
詩に詠まれた胡笳とは西域の異民族が吹いた笛で、蘆の葉を巻いて作ったものと言われますが、雅楽で演奏される篳篥（ひちりき）（悲篥）のような悲愁の感が漂う音色のようです。作者岑参は長安に住む胡人が演奏する胡笳の調べを聞いて西域に思いを馳せて送別の詩を詠んでいると解釈されます。この詩には「胡笳」が十二句の中で四回が繰り返されますが、その悲愁を漂わせる音色がこの詩の基調となっています。
顔真卿は辺境警備の任である節度使として河隴に赴くわけですが、この詩に登場する辺境の地名が「樓蘭・蕭關・天山・崑崙山・隴山」と立て続けに出てきます。何れも長安から遠く離れた地ですが、辺境の地というだけでお互い地理的な関係性は薄く、最終句の胡人が月に向かって吹く胡笳の調べが、エキゾチックな哀愁を際立たせる役割を果たしています。この詩は以前に紹介した王翰や王之渙の「涼州詞」などの辺塞詩に分類されますが、今年三月に紹介した李白詩「黄鶴楼送孟浩然之広陵」と同様に離別の際に宴席で作られた送別詩としても素晴らしい詩です。
顔真卿を見送った翌年。岑参もまた命を受けて河隴よりさらに奥の安西北庭（現在の新疆ウィグル地区トルファン）に赴きました。そして西域に実際に赴いた数少ない詩人として、その荒涼たる風景を都に伝える名作を多く遺しました。（象）

参考文献：ＮＨＫ漢詩紀行・唐詩鑑賞辞典（東京堂出版）・漢詩の辞典（大修館書店）

水は北湖に入って去り　舟は南浦より廻る　遙かに看る鵲山の転ずるを　却って人を送り来たるに似たり

《大意》川が湖の北に流れ込んでいる。私の乗った舟は、南浦から引き返してきた。はるかに目をやると、舟の位置の移動につれて鵲山も位置をかえ、なかなか山までが、人を送ってくれるように思われる。（李白詩・従祖済南の太守に陪し鵲山湖に泛ぶ）

夏雲嶂を牽きて遠く　瀑水渓を引きて長し

《大意》夏の雲は峰の稜線を牽いたように遠くに及び、飛泉の水は谷を引いて長く流れている。（呉筆）

読み　林に隠る木魚の声（林の中には木魚の声がところ知らずに聞こえて静かである（謀晋））

佐藤象雲書

一般部規定課題出品について

・規定課題は段級の区別なく、右掲載の五字句となります。

・初段以下の方に限り、左に掲載してあるように二文字または三文字でも構いません。

・規定課題（楷書）の出品はひとり一点に限ります。

行　書

草　書

※成家・師範の随意作品出品は二点までです。

◇各体とも書風は自由です。特に上位者は古典などを参考に創意溢れる作品をご出品ください。

隷　書

次号課題

空階竹影を書す

ペン字部課題　（７月30日〆切）

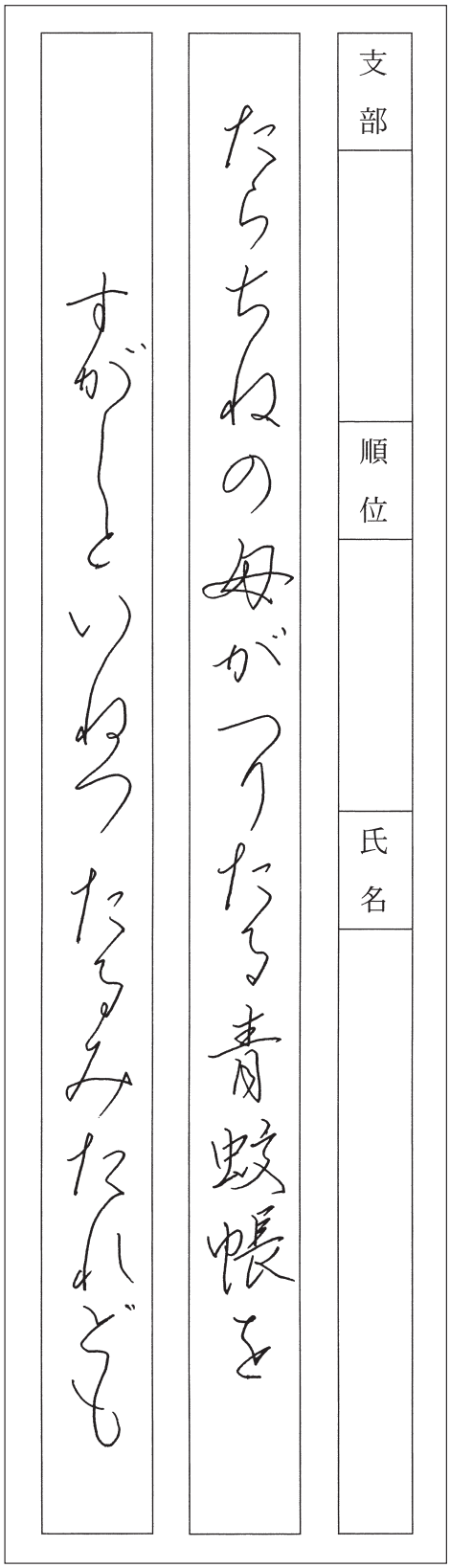
細字部課題　（７月30日〆切）

（両部とも本会所定の指定用紙を使用のこと）

佐藤象雲　書

音　ボクヒシセン　シサンコウヨウ

略解　墨子という賢人は白い糸の悪く染まり易いのを悲しんだ詩経では丈夫羔羊が純一なことを讃えている



長塚　節

和泉溪石　先生書

支部	順位	氏名

■史晨後碑（ししんこうひ）（後漢・西暦一六九年）の臨書 (18)

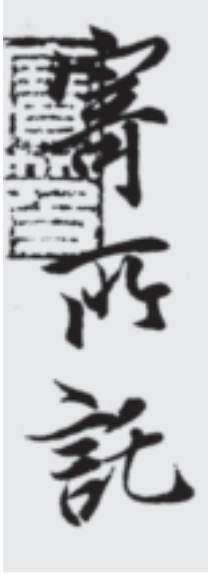
城池に注ぎ（恐縣）……

象雲臨

『注城池恐縣』

篆隷書が展開していた時代は、字体そのものの変遷も激しい時代でしたが、隷書とりわけ八分隷は後漢の百数十年の間で一気に百花繚乱の如く開花し、そして後漢二〇五年に曹操が禁碑令を発布したことにより変遷の終焉を迎えた書体です。書体の定義は非常に難しい問題ですが、一貫した特徴と独自の様式を備えたものを分類したものと言えます。さてそれでは隷書の特徴と様式とは何かといえば、水平・垂直・平行・等分割・左右相称という基本原則に加えて扁平な形をしていることがまず挙げられます。そして大事な筆法の約束事の一つに蔵鋒による起筆があります。

今月の課題には一点特に注意しなければならないことがあります。これも隷書の約束事の一つですが、一字一波ということです。最初の「注」は最後の横画の波磔を優勢に、ほかの横画の横波は強くすべきではありません。また「恐」も同様で下部の心の波磔を優勢にします。



寄せて託する所に（因って）

象雲臨

■王羲之・蘭亭序（東晋・西暦三五三年）の臨書 (20)

『寄所託』

蘭亭序の真蹟原本は唐太宗が智永の弟子弁才から入手して終世愛玩の末、崩御に際し昭陵に殉葬されました。私たちはその臨摸本や搨書家によって摹写された各種の摸本を頼りに王羲之の書法を勉強している訳ですが、諸本の何れが王羲之の真に迫っているか判断がつかないままに習っています。臨書という行為は古典を再現するための技術を養成することも大切な一つですが、これに終始することなく、自分の好むところの書を表現するための、技術の習得に繋げていく心構えが必要です。

「美術は見えているものを再現するのではなく、見えていないものを表現する。」（パウル・クレー）